



ゴールド

FRBの金利引き下げ時期を示唆するサインを探る投資家で2310ドル近辺の狭いレンジで取引

シルバー

太陽光パネルの大手、中国のLONGI、2023年は67.52GWのパネルを出荷、その98%は国外

プラチナ

EU初の水素銀行の入札で、7億2000万ユーロの奨励金が、水電解能力の合計が1.5GWとなる7つの再エネ水素プロジェクトに

パラジウム

4月の中国のvehicle inventory alert indexは前月比で1%上がり59.4%に、しかし前年比ではマイナス1%

インド-UAE CEPA と インドの太陽光発電 セクターの将来性、 インド Silver Conference で テーマに

先日、我々はインドのゴアで開催された第2回目の「India Silver Conference」に250以上の代表とともに参加した。会場では同時に Silver Instituteによる『World Silver Survey 2024』の発表も行われたが、今回の話題の中心は、包括的経済連携協定(CEPA)のもとで増加しているインドのシルバー輸入と、太陽光発電市場の将来性であった。

CEPA がインド経済に与える影響に関しては、2年前に締結されて以来、我々の『India Monthly』にて数回触れてきたが、簡単に説明すると、2022年2月にインドはアラブ首長国連邦(UAE)と、関税引き下げによる両国間の貿易振興を目的に自由貿易協定を結び、段階的な関税撤廃の対象として、UAEからのシルバーの輸入関税は毎年1%ずつ下がり10年間でゼロになるとした。

初年度のCEPA枠と通常の輸入の関税の差はわずか0.5%だったが、2023年2月にインド政府がCEPAの枠外のシルバー地金の輸入関税を15%に引き上げたことから、その差は拡大した。CEPA枠の関税は2023年5月から2回目の引き下げを経て現在9%であるから、通常の輸入関税よりも明らかに有利だ。UAEから輸入するシルバーには3%の付加価値をつけなければならないことを考慮しても、UAEから輸入するシルバーの方が魅力的なわけだ。

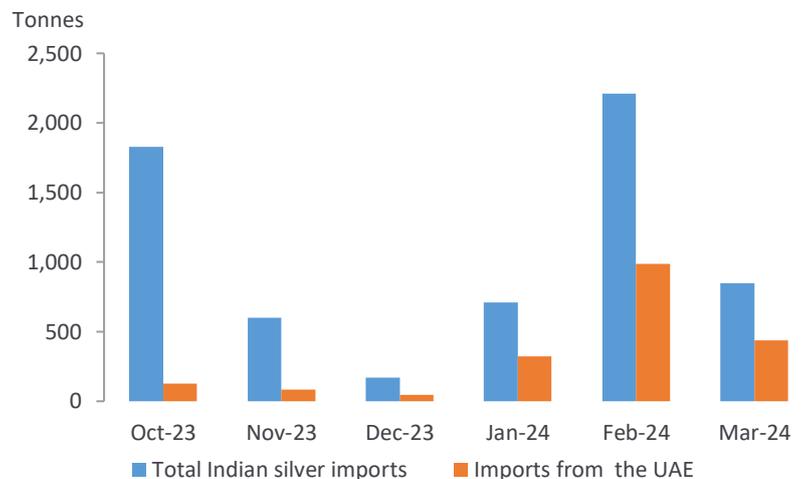
CEPA枠によるインドのシルバー輸入は2023年7月頃から始まり、輸入量が増え始めたのはインド国際地金取引所(IIBX)が2023年12月にシルバー取引を始めてからで、2024年1月以降に輸入量が急増している。第1四半期は3770トン、2月は過去最高の2211トンが輸入された。

ちなみに2024年第1四半期の輸入だけでも、2023年全体よりも9%多く、そのうち888トンがIIBXによってUAEから輸入されている。

インドのシルバー輸入全体に占めるUAEの割合は、2年前は1%にも満たなかったが、これが2023年には13%になり、2024年は現時点で46%にまで増えている。インド国内のシルバー需要は特筆するような回復傾向があるわけではないことから、輸入量の急増は関税差を利用して利を得る取引や、政府が有利な輸入品に対する規制をかけないうちに輸入しようとする取引と見られる。我々が調査したところによると、輸入されたシルバーのうち約30%から40%はまだフリートレードゾーン内の倉庫に保管されたままだ。

もう一点、今回の会議で注目を集めた議題として、シルバーの工業需要および、インドにおける太陽光発電セクターの将来性があった。インドは国際エネルギー機関が定めたネットゼロ目標を達成すべく、2030年までに再エネによる発電能力を500GWに高める計画に加え、インド独自のNational Electricity Plan (NEP)において、太陽光発電で2027年までに185.6GW、2030年までには365GWを目指している。つまり2023年末で消費電力の16%だった太陽光発電エネルギーを、2倍の32%にまで増やす計画なのだ。

インドのシルバー地金輸入



出典: インド税関、メタルズフォーカス

現在、インドの太陽光パネルによる発電量は 81.8 GW で、上述の目標を達成するためには、2030年まで毎年、40GWから50GW 増やしていかなければならないが、これまでの進捗状況を見ると、これは困難に見える。例えば2023年に太陽光発電で新たに加えられた発電量はわずか 7.5GW で、前年比で 44% も減っている。インド政府は再エネ戦略の一環として、太陽光パネルを輸入に頼らずに国内で生産することを奨励しており、パネルには 40%、太陽光電池には 25% の輸入関税がかけられている。インド国内の製造能力の限界を考えると、この高い輸入関税が太陽光発電能力の増強を妨げている面があるといえよう。

このような状況の中、インドでは国内の太陽光パネル製造の強化に乗り出しており、パネルに塗る銀ペーストの生産で地元の研究機関と企業の共同研究が始まっている。今回の会議でも銀ペーストの生産に必要な技術や設備などが話し合われたが、インド国内で生産が可能になれば、太陽光発電能力を大幅に増やすことができるだろう。2023年の銀ペーストの需要は輸入の 23トンで賄われており、組み立て済みの太陽光パネルの大部分は輸入品だ。しかし海外のサプライヤーと協力してインド国内で銀ペーストの生産を目指す企業もある。短期間で目に見えるような成功を収めるのは難しいが、このような動きはインドの太陽光発電能力の増強を後押しすることになり、ネットゼロ目標達成だけでなく、国内のシルバー産業の促進にも役立つだろう。

インドの電源別発電電力量 (%)

